OB会報

第一号

横浜国立大学

ワンダーフォーゲル部

O・B会発行

1963・10・30

飛騨合宿

（参加の記録から）

本年度夏合宿は六つのパーテーに分かれ、飛騨地域を踏破した。これはOBの井上、嘉納が一部参加したので之の感想をまとめ、後日の反省会に出席した松本にその様子を語ってもらった。

夏合宿が八月にまわったおかげで四日ばかりであったが参加する事になった。そしていろいろ調べた結果今年度もうけられた高山の本部に参加し、途中郡上八幡に七隊を訪れる事にした。

七月三一日は雨だった。部屋でパッキングをしていた四人が傘をさして街中へ消えた。三隊が出発。あけて八月一日。二隊と六隊が三隊より二四時間遅れて出発。そして夜、悪たれにひっぱりまわされて東京～新宿～東京と一隊、四隊、七隊の見送り。シャクにさわったから悪たれを東京に残していっしょに列車に乗る。途中まで。二日は夕方五隊が出発し七つの隊が集結地高山をめけて行動を開始した。

二日夜本部隊員四人と共に出発。三日昼近く高山城山公園到着。テントを張って本部が出来上り。土曜日でしかも郵政大臣のお国入りとあって本部として早くすませてしまいたい事務的な仕事は全々行えず。これは六日になってもまだ終っていなかった。

午後は買い出しに街に出る。地面までとゞきそうな長いのれんをくゞって味噌としょう油を買った時には街並の古さを感じさせてくれた。夕方やって来たのが夕立。雨上りの街では盆踊りが行われていた。見よう見まねで何とか覚えて踊りの輪に入りこんで踊りだしたと思ったらチョン。これも大臣のせい。

四日は主将副将に本部の事はまかせて、一年二人と共に郡上八幡へ。美濃太田で乗りかえ。待ち合わせの時間を利用して通りを歩き、七隊の為にスイカとウリを買う。ところが八幡に行く越美南線は満員でスイカがつぶれはしないかとヒヤヒヤ。越美南線にそって流れるのが長良川。高山線にそって流れるのが木曽川の支流の益田川。一年生はこの二つの流れが同じようにみえたらしい。長良川の方がゆったりしてるのに。八幡に着く。駅のスピーカーからは有名な郡上節が流れて来る。それを聞いて途端に空腹を覚えたかホームのベンチで昼食。

あえぎあえぎ登ったところに古風な城があった。街並が一望。高山同様、古い屋並がぎっしりつまってた。街を二分して流れる吉田川は子供達の水泳場でにぎやか。青年団員とは会えたけど七隊の面々はまだつかず。夕方再び川をのぞいてみれば今度はアユつりの人影ばかり。この日も来た夕立。その雨の中をやっとの事で七隊の面々がやって来

た。遅れたのでメシも食わずに交歓会々場の公民館に来たという連中に、さっそくウリとスイカを出す。ところが交歓会の自己紹介の時に私にはきらいなものが四つある、その第一はこのウリ、というのがいるんだものいやになるよまったく。交歓会はやがて郡上踊りの練習所と化した。青年団員も楽しそうに教えてくれている。そしていつしか雨も上っていた。ひととうり踊れるようになったら青年団員と共に街中へ。一つの通りを仕切って踊りは行われていた。輪は当然超長円形になる。この輪に入りこんでひとまわりしたら三〇分程かゝった。踊りが終ればもう一二時。テントサイトは八幡から四つ先の美濃弥富。列車はないし車で行く。その乗り出のあった事。着いた時まわりをみたらみんなねむってた。夜食を食べてねたのは三時。

五日一〇時起床にある子が七時間てこんなに長いものかと思わなかったなどと言った。朝食を昼に食べて三人は再び高山にもどる。

夕食がすんだと思ったら四隊から一人やって来た。槍、双六、笠をこえて無事槍見に下ったというニュースを持って。午前二時頃ので東京に帰るというので一時半頃見送ったと思ったら金を借りるのを忘れたともどって来る。汽車賃しか持ってないんだもの。食費を貸してくれだって。そこで五時頃ので帰らす事になる。ところが横になったら寝るにきまってる。この起し役をひきうけたのが一年。四時半まであきる事なく話してた。送り出してやっとねむりに入る。

六日も日が高く登ってから起きる。天守閣跡に登ってみたが何もなし。北アルプスも見えなかった。

およそ合宿とは信じられないような生活と言われるかもしれないが、これが最初の頃の本部の生活である。帰る頃にはあちこちから便りが本部にやって来だした。そしてそれを他の隊に伝えるべく本部隊員はペンをとっていた。

（井上　記）

十一日夜ガラスキの"第2いこま"で東京出発、朝九時に高山に到着した。ワンゲルのテント村には一時にゆくことにしてそれまで市内見物をした。日ざしは強いのだが、空気が非常に乾いていて、汗をかゝず木蔭はすゞしい。町全体がとのい美しく、落ちつきのある通りである。あちらこちらと一人であるきまわって、一時に城山公園のテントサイトに行くと丁度これから各隊の行動報告会が開かれるところだった。公民館の中で各隊が全部無事で行程を終ったのを聞いたが、全員昨日高山につき昨夜はゆっくりしたと思われたのに、やはり長い旅のつかれが感ぜられた、今回の合宿の中心が踏破と云うロードワークにあったせいか、いつもの合宿よりもよけいそう思えた。夕方から合宿のフィナーレ、高山市の婦人会とユースホステル会と共催するキャンプファイヤーの準備がはじまり巨大な薪の山が出来あがった、民謡のレコードもそなえて日が暮れかゝる頃キャンプファイヤーの火が大きく熱え上った。高山方言で述べたユースホステル代表のおもしろいあいさつから郡上音頭の踊り学生の余興などが次々にと行なわれ、おもしろい夜となったが、キャンプファイヤーにお客様を招いた

のははじめてのことであり、今後考えるべきことも多く目についた、まず何といっても我々の準備不足であろう、人数が百五十名を越えると一つのファイヤーだけではどうしても暗いこと、我々の出し物も学生らしい工夫をこらしたものを考えておかなければ、即興のものばかりではあまりにみじめであること、お客様と我々とが一緒になれるような何らかの工夫、ともかく、内輪だけの楽しみで終るようではお客様を招いては気の毒であると思えた。

翌日解散してから高山郷土館に立ち寄ってみたらばったり、OGの石田嬢に出会った。先生方の旅行の途中とお見受けしたが、ワンゲルの大部隊に遭遇するのは恥しいと逃げてしまわれた。

（嘉納　記）

九月八日（日）現役夏合宿反省会があるというので、鎌倉へ嘉納顧問と出かける。凡そ四時間程意見がたゝかわされていたが、ワンゲルも何か大世帯になった現在、昔と違って昔には考えられなかった様な問題が起ったり、又依然と変らぬ問題が論じられていたりして興味深いものがあった。ワンゲルとは何をし、何を目的として活動しているのか、という問題が、合宿の目的や活動内容と共に、どうしても派生して行き詰っている姿を見ると、昔も今も変らない根本的な命題に解決の方向が得られていない一沫のわびしさと問題の深さを覚える。創立した我々の世代にあっても結局未解決に近い状態に終って卒業しただけに少々責任を感じる次第。然し今の現役の考え方の中に、余りに頭の中だけで考え過ぎている非常に観念的に過ぎる一面がありすぎないだろうか。統一的な綜合テーマをたてゝ、合宿に入り、終了後に我々は一体何をしてきたのかと、理論づけに大童になっている。

聞く処によると、合宿起案の時に討論不足のまゝ合宿に入り、反省会でその欠陥が暴露され混乱に陥っている様に思われる。ワンゲルは以前から討論下手であり、一部の幹部の発言に振り廻わされ、後は何となくついていくだけの有象無象が多かったと思われる、自分の意見をよくまとめて発表する能力をつけることもワンゲル部員に要求される技術の一つではないかと痛感される。ガヤ〳〵ワヤ〳〵と適当に集まるだけの団体ではない筈だ。日本人は一体に討論や団体活動が下手であるといわれる。日本の自然を舞台として団体活動を行うワンゲルには、この様な国民的欠陥を矯正する事は大きなワンゲルの目的の一面であることを忘れてはならない。何時間も座ったまゝで発言しようともしない部員には大いなる反省を促すと共に、意見をもたない者は去れといえるのではないか。

何か現役への苦言に近い内容になったが、反省会終了後鎌倉駅前の"扉"で所場の人達と、とりとめのない雑談に近い話をしている内に意外に楽しい時間を過せた。ワンゲルの活動の話、OB会はどうあるべきか、会社の話、人の噂等をしている内に、各々考えさせられる事があった。若々しく自分を疎外しないで、伸び〳〵と過せる学生生活の話を聞く内に、何となく楽しさを持てるのは素晴らしいことだ。現役の方からも年に一度位企画してOB会の接触を

図る集まりを持つのはどうであろうか。ＯＢ会自体にも、その活動を如何にすべきか、今度の総会で将来の方向を定める必要があるが、ともかくも良い友人の集まりであるＯＢ会をよくする様にもっていきたいものだ。殊に顔も名前もよくしらない世代の人達が、どん〳〵とＯＢ会へ入会する様になった一つの転機を考えさせられる反省会の一日であった。

（松本　記）

高峯高原スキー

（才二期生）

日時　四月二十・二十一日
場所　高峯高原・高峯高原ホテル
参加者　岩上・岩村・倉田・藤林・吉野

後記　少々シーズンをはずれているような気もしたが皆の熱心な希望により、かねてより一度は訪れてみたいと思っていた高峯高原にて才二期生希望者によるスキーワンダリングを行った。事前に再度問い合わせをして雪の有無、リフトの運転状況等を確めておいたにもかかわらず、現地に着いてみて驚いたことには、広々としたスキー場に熊笹が顔を見せ雪のある部分の方が少ないという有様、むろんリフトも動いていない。ハテ困ったといっても折角来たものを今更帰るわけにも行かないし、のどかな所も又一興だろうということになり、その一部の雪の上で滑り始めた。滑ってみると結構楽しいもので、シーズン中の混雑したスキ場と比べるとまるで夢みたいな話である。つまり、初日の二十日は私達のグループだけで、自由に滑り、そして転ぶことができた。リフトも動いていないから必らず歩いて登らねばならない。嘉納先輩の精神が生かされているようで全く愉快であった。

宿は国民宿舎高峯高原ホテル、余り空いているので気持が悪いぐらいであった。

翌二十一日は日曜日、一番バスで何人かの気まぐれスキーヤーが加わり私達のささやかなスキー場もいくらかにぎわった。ガンちゃんの上達ぶりは目ざましく、旗をたてたパラレルスイスイで回れるようになった。又岩村、倉田両嬢も実に見事なスキーさばきで、さすがはワンゲル出身と感心させられた。

ともあれ、季節外れのスキーを一日半たっぷり楽しんで、皆満足して帰途についた。

（吉野　記）

一、三七・十一・三
経済学部

才二回総会開かる。出席者才一期・才二期併わせ十五名。嘉納秀明（才一期）現役への顧問就任承認。ＯＢ会会報発行承認（各年代廻り持ち）　ＯＢ会規約承認後日配布の事。会員徴収方法は各年代幹事責任徴収方法を採用する。

一、三八・三・三一
経済学部

現役総会に出席し、その後出席ＯＢの会合により次の

決定をする。
ＯＢ会合を次の様に定期的に行う。
三月　ＯＢ会新入会員決定。懇談。現役総会に出席。
七月　夏期懇談会を行ない、夏季合宿の話を現役から、そしてＯＢ討志の夏期休暇を相談をとりまとめる。
十一月　大学祭総会、会計報告や年間行事計画を立て、現役追り出しコンパ打合せを行なう。
一、十二月　忘年会と共に、スキー行等の打合せ会にする。
七月、十二月は各年代が持ち廻り幹事で行なう。尚この日にはｱ三期ＯＢ会員二十名の入会が決定した。その後横浜駅ビルで夕食会を行なう。

一、三八・七・十六
ＹＭＣＡ食堂
ｱ一期桑原氏幹事で、先の決定に基づきコンパを開く。
出席者、嘉納、松本、河野、桑原、吉野、塚原、藤林、岩上、茨野、倉田、氏平、斉藤、三神、井上、白井、江崎、栗田、石田、横手、井田、甘柏、以上二一名。
現役斉藤外三名。
久し振りに、会いｱ三期生かつての山男、山女が新会人らしくなり一驚する。

会計報告

三八・一〇・三〇現在

1. １９６１年度

寄附	１０名（ｱ１期生）	１０,０００	
	現役へ○ワカー２台購買（横浜双葉家具）		
会費	１０名分	１０,０００（現役へ金額補助）	

2. １９６２年度

ｱ１期生	５名	５,０００	（１０名）
ｱ２期生	１２名	１２,０００	（１２名）
計		１７,０００	

3. １９６３年度

ｱ１期生	３名	３,０００	（１２名）〔桑原・河野入会〕
ｱ２期生	１２名	１２,０００	（１２名）
ｱ３期生	２０名	~~２０,０００~~ １５,０００	（２０名）
計		~~３５,０００~~ ３０,０００	

収入総計　~~47,000~~
42,000

支出　38.7.16コンパ現役半額補助分2,000（4名）

従って現在在高~~45,000~~　三菱麹町支店預入
40,000

編集後記

○総会で本紙発刊が決められたのは、もう一年も前のことで、かくもヤ一号の発刊が遅れたことをまずもってお詫び申し上げたい。

○今回は夏合宿のことが多くなってしまったが、今後、OB会自体の活動も活発にし、そうしたことを中心に編集したいと考えている。なお、編集の方法、発刊の時期等について、来る総会でご相談申し上げたく思っているが、特に地方の方には、ご意見をハガキなどで伝え願えれば幸である。

○ワンダーフォーゲル自体、転換期をむかえている今日、我々OB会も、これから先の基本的な問題について、十分な検討を加える時期に到っていると思われる会員諸氏の協力を願う次ヤである。

完

追記

十二月七日八日と恒例の四年生追い出しコンパが丹沢山麓青山荘に於て行なわれた。OBで参加したのは松本、田上、嘉納。二期生は斉藤一人だけ、三期ははるばる四日市から金田、静岡から高橋と色の黒いのはやはりタフだ、特に高橋は雪の富士に登って来たばかりと云う。井田、白井、江崎、若い女性の友井上、OGの方にはすべてすばらしいペアを得て土、日などはデートに忙しく、ワンゲルどころではないと疑われるほど一人もおいでなかった。

余興の部では例の嘉納節（ぶし）で「大きく大きくなあれ」とか「ごろごろごろごろやきいもごろごろ大変あついよあいよ」などと云う幼児体操を全員でやりカッサイをはくした。

続追記

十二月十三日（金）、一期生の小悪魔連が忘年会を松本氏のドヤにて開催、参加者専務取締役佐藤文雄氏、常務取締役河野哲氏、平社員桑原、田上、望月、松本、落ヤ生嘉納の七人、ガヤガヤとにぎやかなことでした。

続々追記

十一月三日大学祭の際鎌倉の寿司屋にて秋期総会が開かれ、OB会の将来の問題などが話し合われた。

完